

こうして…、人間が居なくなつて暫くが経ちました…。

最初に、アイを見つけたのはトンボでした。トンボは草むらの蘆に宝石のよう
に美しい色をしたクレヨンを見つけて拾い上げると、仲間のみんなに見せて回り
ました。

「一どりうだい！、綺麗だろう！、オイラが拾つたんだ。オイラ、こいつがあんま
り綺麗なものだからずーっと見ていたら、風が吹いてひっくり返つて、人間が居
なくなつた跡に落っこちていやがつた。へへー、いいだろー！」

アイを拾つて自慢しているのは仲間内で“タ焼け太郎”と呼ばれている一際、
赤い色をしたトンボでした。

アイは、生まれて初めて舞う大空に…まるで自分が吸い込まれていくようで、
楽しくて楽しくて仕方ありませんでした。

アイは…

『空こそが自分の住みたい本当の住み家なのだ！』と、思いました。
そこで、アイは思わずトンボに尋ねました。



「太郎さん…どうしたらお空を飛べるようになれるんですか?」

その言葉に太郎はびっくりして、困こんでいるアイを落としそうになりました。

「なんだ、なんだ、なんだ…!、おまえ喋れるのかよー。オイラもう少しでおまえのこと海の中へ落つことすと」だつたぞ!」

しかし、海を知らないアイには、そんなことは平氣な」とでした。

「ねえーつてば、太郎さんー!」

「…なんだよ! 蔽から棒にー。それはだな…んー、つまり、…その、オイラも、オイラの父ちゃんや母ちゃんも、そのまた祖父ちゃんや祖母ちゃんも、ずっとずっと昔から空のことばかり考えてきたんだな。そしたらいつの間にか飛べるようになれたー。…ってな訳さ。

—ところで、お前は何でそんなに綺麗な色してるんだい?」

「えつ、僕?…僕って、本当に、キレイなの?」

「ハハハハハーツ、何言つてるんだい! キレイに決まってる。だって、空の色にそっくりじゃないか!」

「空の色に?…僕が?空の色に似てるの?でも…でも僕、分かんないよ! 僕のどこがあの空と似ているの?—ねえー太郎さん、教えて下さい! 僕のお父さんとお母さんは空なんですか? 僕もいつか飛べるようになれるんですかー!」

「やつという意味じゃないよー」

「えつ嘘!、僕のお父さんとお母さんは、空じやないの……」

「あー、残念ながらそいつはあり得ない話だね。キミは空に似ている、けど空じやない。…だから空も飛べないのさ。でも…、いいじやないかそんなにキレイな色しているんだもの。…僕なんか、逆にキミのことが羨ましいよー!」

「嘘だ、そんなの!」

「嘘なもんか。だって僕らは直に死んじやうんだもの。キミなんか、絵になつてずっと生きられるじやないかー」

「死んじやう…死んじやうつて…どうなるの」

「もう、一度と空を飛べなくなつたことさ。それだけじゃないよ、この世界から居なくなつちゃうんだ…」

「えつ、一本当に無くなるの？」

「土に還るのさ……」

「…」

「…キミには解らないと思うけど。生き物はみんなそういう運命なのさ…。キミなんか綺麗な絵になつてずーっと生きられるんだもの、その方がずーといいじゃないか、だろ?—」

「…でもそれは、綺麗な絵にならなくちゃならないってことでしょ…?もし、綺麗な絵になれなかつたらどうなちやうの?」

「ハハハハハ、ハハハハ、その時はキミもお払い箱だね。いずれみんな土に還るのさ!、…結局同じだね。ははははは—」

「土に還るつて、—どうなつちやうの?..」

「こつこいな!、—オイラしつこい奴は嫌いなんだ。せいぜいお払い箱にならないうに氣をつけるんだね。じゃ—」

そう言つとトンボは、アイを放り投げて飛んで行つてしましました。

アイは、再び見知らぬ草むらへと落ちて行きました。

…こうしてアイは、

誰に気づかされることもなく、季節は巡つて行きました。

—寒い風に凍える長い夜がやつて来ました。アイは、深い眠りに包まれながら闇の中に溶けて行きました。



…やがて穏やかな、暖かな日の光が訪れるころにアイは目覚めて行きました。
そこには…、美しい花びらが開き始めて行く光景がありました。